

# LAMPIRAN

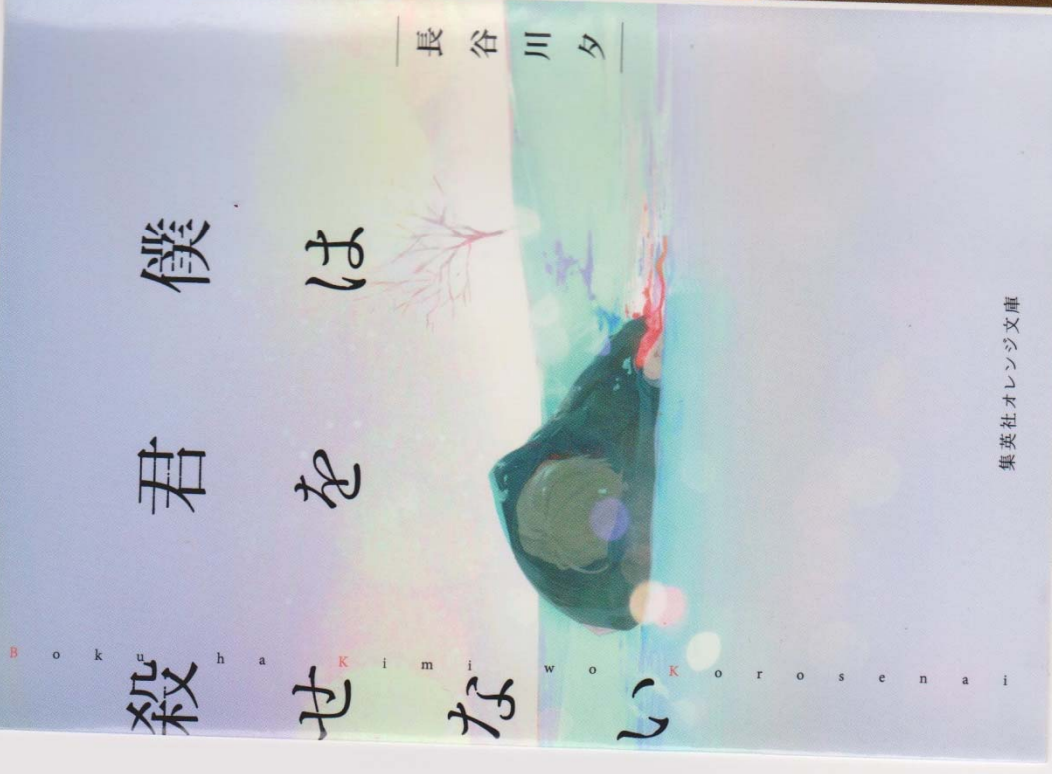


は 2-1

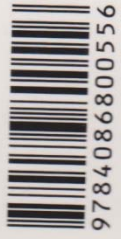
長谷川 夕

僕は君を殺せない

集英社オレンジ文庫



集英社オレンジ文庫



9784086800556



1920193005509

ISBN 978-4-08-680055-6  
C0193 ¥550E

定価 本体550円+税

夏、クラスメートの代わり  
にミステリアーズツアーに参加  
し、最悪の連続猟奇殺人を  
目の当たりにした「おれ」。  
最近、周囲で葬式が相次い  
でいる「僕」。――一見、  
接点のないように見える二  
人の少年の独白は、思いが  
けない点で結びつく……!!  
すべての始まりは、魔遊園  
地にただだよ、幼女の霊の  
噂……？ 誰も想像しない  
驚愕のラストへ。二度読み  
必至、新感覚ミステリー!!

問題：だれが「僕」で、だれが「君」でしょう？

僕は君を殺せない

6 たまはドラマや映画などで、高いところから吊るされた首吊り死体を見るときがあるでしょう。僕はそれを見て、あれほどの高さでなくてもいいのに、と思うのです。それに縄でなくても。

ドアノブとタオルで事足ります。

ある日、学校から帰ってきて、玄関のドアを開けようとした。妙な重さがあって細くしか開かず、おかしな音を傾けながら、ドアを力任せに押ししました。

ドアノブには、父の死体がぶら下がっていました。

心身ともに病み疲れていた父の最期を、僕はすいぶん前から予感していました。そう遠くないうちに、壊れてしまうことを、わかっていました。もうずっと限界だったのです。わかっているながら、僕には何もできませんでした。何かしてあげたかったと、そのとき強く思いました。

三和土に置いてあった白い紙に気づいて、手を伸ばし、指先が届きました。紙を開いて、字が目に見え始めた瞬間、父の叫びが聞こえた気がしました。

\*

え？ ……こんにちは。

…どこかで会った？ 悪い。おれ、人の顔覚えるの、苦手なんだよね。

ああ、会ってないの、あつそ。

あれのこと？ 『風月村』。とうとう解体するんだなあって…。ああ、あんた、地元民じゃないのか。

駅から商店街入ってくる時、角に、煙草屋があった。その向こうの分岐を北へ折れていくと、幹線道路にぶち当たるんだけど、合流のすぐ手前で右折すると、しばらく幹線道路と併走する、片側一車線の県道に出る。

出たら北東へ、道なり。

ここからだ、車で十五分程度かな。山間の、入り組んだ場所。名前に村とかついているけど、テーマパーク？ 遊園地？ そんな感じ。

7 ああ、解体するのは知ってたよ。前々から話が出てた。まだ残ってたんだ？ っつ人も多いかもね。こうやってテレビで、ニュースとして流れてるのを観ると、変な気分。

僕は君を教せない

……放せよ。痛い。放せて……。

知るかよ。知らないってさつきから言ってるだろ。放せ、この野郎！  
クッ……。

………わかった。

あんた、最初から「おれ」に会いに来たな。

電器屋のテレビの前で偶然なんて顔して――。

あいつの何を調べようとしているのかは知らねえけど、だったらあいつ自身に聞けばいい  
じゃねえか。……東京にいるだろ。町田だよ。町田市！はあ？神奈川？冗談？東  
京の地理なんて、どうでもいいんだけど。とにかく、そつちにも行けば。  
………。

……あいつが死んだ？

\*

午後七時。

朝から続く曇り空から、やつと雨が落ちてきました。とうとう天まで泣いてくれたよう

で、最高のお葬式日和です。きつとあいつも、浮かばれることでしょう。

彼は神様を信じていました。彼が神様を信じていたことを、彼の家族は誰も信じていな  
かったため、葬儀は仏式でした。

冷たい秋雨のなか帰宅すると、狭い玄関に、レイの靴がありました。いつもながら、な  
んという主張の激しさ。靴の位置はいつもスペースの真ん中です。ローファー。学校帰り  
でしょう。

台所から洩れ聞こえてくる、野菜を刻む、軽快な音。何を作っているのでしょうか。気に  
なります。レイの作る手料理はとても美味しいのです。美人で料理が得意な恋人の存在を、  
親友からたびたび羨ましがられます。

コンビニで間に合わせたと二ル傘を、傘立てへ無造作に突っ込み、靴を放り出し、廊  
下へ背を向けて、玄関に腰を下ろします。瞬間、廊下の奥にあるガラス戸が開く音がしま  
した。

短い廊下をばたばたと駆けてきて、僕の背中におかえりと声をかけるより、振り返らせ  
てただいまを言わせるより先に、レイはいつものマシンガントークです。

「あれ？制服じゃなくてスーツ？似合うじゃん。そんなの持ってたっけ？あ、そっ  
か、こないだ誰か亡くなったって言ってたときに買ったやつだ？ねえねえ、学校休んで、

12 どこ行つたの？ バイト？ 黙つてないでさつさと入れば？ 汚いところだけ」

こは僕の家です。閑静な住宅街の一角にある六階建てマンション。鉄骨造。の、最上階の一室で、僕の名義です。雪深い田舎、その名も岐阜から上京しまして、高校入学と同時に入居しました。かれこれ三年半ほど前のことになります。

建物自体は築三十五年になりますが、室内は入居前にリフォームされ、畳敷きだった六畳間も今はフローリング化されたLDK。けして粗末な内装ではありません。汚い呼ばわりされるほど散らかつてもいません。なんて失礼な人なのでしょう。

もちろん、そんなこと、口が裂けても言えません。万一反論などしてしまつた日には、きつと口を裂かれてしまいます。レイはほんとうにそういうことをする女性です。

開けた放しのガラス戸の向こうにある台所から、温かい匂いが漂つてきました。どうやら鍋です。冷たい雨のなかを帰つてきた身体に染みます。

しゃがんだままレイを振り仰ぐと、レイは僕の真後ろで、両腕を組んで仁王立ちし、やたら得意げに微笑んでいました。どうして得意気なのですか。あと、地味に、膝で背中を蹴られている気がしますがなぜです。

ウェーブがかつた腰までの茶髪を赤いリボンでまとめ、前髪はヘアピンで右側に留め、ネイビーブルーのシャツの袖をまくり上げ、黒いエプロンをしています。

エプロンの裾からチェック柄のプリーツスカート。やはり学校帰りそのままのようです。ちなみにエプロンは僕のものです。

「ぐずぐずしない！」

「はい」

レイの靴と一緒に、既いだばかりの革靴を端に寄せます。おもむろに立ち上がりながら、チャコールグレイから黒に変色している濡つた靴下を脱ぎ、廊下をべたべた歩きつつ、靴下を、脱衣所の洗濯かご目掛けて投げました。

濡れた重みもあつて、ちょうど洗濯かごにイン。これで三十日間連続成功。バスケットボールはほとんど経験がないのですが、ひよつとするとひよつとすることもかもしれません。NBA。なかなか良い響きです。

視線を感じました。危険信号です。脳内に警鐘が打ち鳴らされます。

ガラス戸のほうを恐る恐る見やると、台所へ引き返そうとしたレイが、振り返っていました。鋭い視線で、こちらを串刺しにしています。

普段、華やかな美人と評される彼女です。顔立ちは派手で、ぱつと目を引きます。勝ち気な吊り目、つんと尖つた鼻梁、常にきゅつと引き結んでいる小さな唇。

外見通りの性格をしています。

とため息を吐きそうになりました。危ない！ 飲み込みます。

女の人というのは、機械が苦手な生き物で、レイもその二分に洩れません。というよりおそらく、極端に不得手とするほうです。

「レイちゃん、コードも一緒になかった？」

「コード？」

「テレビと繋ぐやつ」

「知らない」

いえ、知らないのではなく——つまり、これから食事を終えたら僕は、あの押し入れを漁って、テレビとゲーム機を接続するコードを探さねばなりません。早くしないと叱責されながら。

\*

で、何が知りたいって？

おれのところまで来るくらいだから、けっこう詳しいんじゃないの。

……へえ、大まかに知ってるんだったら、もういいじゃん。おれの目でどう見えていよ

うが、余程に、さほどの差異はないと思うけど……。

……清瀬と……会ったのは、長距離バスの車内。

おれはミステリーツアーのモニター参加者だった。でも、別に自ら参加したわけじゃない。知り合いが、付き合いで参加しないといけないのに、どうしても都合がつかないからって持ち掛けてきた、身代わりのバイトだったんだ。

暑かった。その夏の、いちばん暑い日だった。

いちばん最初に死んだのは、春川つて一家だ。もうその時点で、いくら破格のバイト料とはいえ、はいはい請け負ったことを、後悔したさ。

あんな事件に巻き込まれるってわかってたら、絶対に行かなかったのに。

一年前の、夏だ。

おれはクラスメイトに依頼されて、ミステリーツアーへ参加することとなった。

バイトを持ち掛けてきたそいつは、秋津つて名前の男。地元の商家の次男で、金持ち。前金として五万、一週間参加すれば二十万！

27 高校生のバイトでは稼げない額を提示されて、極貧のおれは、先に決まっていた海の家で、の時給九百円のバイトなんかさっさと放り出して、すぐさま飛びついた。

立候補者殺到。最後はじゃんけんだつた。勝つたのさ。

聞くところによると、来年から始まるミステリーツアーの企画立案者が、一度モニターテストしてみたいって理由で、参加者を募<sup>お</sup>つてたんだつて。けれど、どうも集まらなかつたらしい。一週間拘束つて話つたからかな。学生ならともかく、大人が一週間は厳しいもんな。

秋津も、知り合いに頼まれたつて言つてた。そのときは快諾しただけ、優先したい用事があとから重なつてしまつて、参加できなくなつたらしい。かといつて今更断りづらいから、自分で代わりの人間を調達することにしたんだと。バイト料は先方から出る分もあつたけど、秋津も少し乗せてるつて言つてた。

内容としては、ツアー参加するだけの簡単なもの。詳細は現地で。あとはそつだな。おれの本名じゃなくて、秋津の名前で参加してくれつて。ばつが悪かつたんだと思ひ。条件としてはそれだけ。

バスの車内で、現地のパンフレットが配られた。といつても簡素なやつ。白い三つ折り。ミステリーツアーだからかな、表紙には美しい日本語カリグラフィで、  
「ようこそー」  
「へー」  
白抜きにされてた。

パンフレットを開くと、モルタルの壁の青が鮮やかな、洋館の写真が載つてた。年季入つてそつだけど、なかなかお洒落な邸宅。写真の下に、やたらめつたら斜めになつてるイタリックで、『蒼五郎』つて書かれてた。ルビがなかつたから、勝手に『アオタマテイ』つて呼ぶことにした。

どうもこれが、宿泊先らしい。

瀟洒な外観全景から始まつて、シャンデリアが光散乱している華やかなホール、落ち着いた調度の居間、猫足のロングスツールとか、情趣のある各部屋の様子。最後に全体の間取り。

女の子なら喜んだかもしれないけど、おれは、どうも気後れがしたかな。こんな派手なところ、泊まつた経験ないし。

参加者は多くなかつた。バスは一台。

家族五人。

老人男性がふたり。

五十代くらいの男性がひとり、六十代くらいの女性がひとり。

若い男が三人。

そつておれ。

池袋駅、夜二十時発。臨時の直通夜行バス。

今思つと、地獄行き直通。

現地に到着したのが、翌日の正午ちよつと過ぎだから、十六時間近く揺られていたことになる。長すぎるだろ。高速使つたら、本州から出られるんじゃないの。

妙な細工のしてあるバスだった。

厚手のカーテンを締め切つてあるんだけど、車窓の低透過率のプライバシーガラスに、内側から、スモークフィルムまで貼つてあつたんだ。運転席ともパーテーションで区切られて、前方も見えない。完全に、外の世界と遮断されていた。企画会社の意向で、到着地点をどうしても秘匿したかつたらしくて、携帯電話の電源も切らされた。

閉塞感に愚劣しくなつたのは事実だけど、そのときはその説明で納得したさ。乗つちまつたもん、仕方ない。

うんざりするほどの長時間をバスに揺られて、へとへとおれたちがついに下車したのは、どこともわからない山のなかだった。携帯の電波も入らず、自分たちが今どこにいるのか、さっぱり不明。

夏。クマゼミが騒々しく鳴く、猛暑日だった。日差しは強く、風もない。ねつとりと停滞した熱気。後にも先にも、おれにとつてあれほど暑い日はない。

長く整備された様子のない、路肩がぼろぼろの道が急に拓けた、山中の駐車場だった。といつても駐車場にはアスファルトは敷かれておらず、土埃が舞う地面。

おれたちを残して、バスは帰つていった。バスが下つていく一本道と正反対にある門をくぐれば、こぢんまりとした別荘地といった風情だったな。疎らに生えた高い木々。初級ハイキングコースみたいな森の小道に、小川なんかも流れてた。

屋敷が一軒、丘の上にはがる森の手前に、ひっそりと行んでいた。高級なりソートとはいかないけど、保養地つて感じで、のどかな雰囲気はよかつたよ。

出迎えに、使用人の男がひとり。居間に通されて、そこで出してくれた軽食を食べながら、簡単な説明を受けた。そのあと、各自の部屋に案内された。おれに与えられたのは、二階の角部屋。あまりにも疲れてたもんだから、部屋で荷物を下ろしたら、いつの間にか寝ちゃつて、気がついたときにはもう日暮れだった。

居間に向かつたものの、人は疎らだった。知り合いもないし、部屋に戻ろうかと考えていたところで、何人かが眠そうな顔をしてやつてきた。他の人もおれと同じように、自室で寝てしまつてたんだつて。

自己紹介でもするか？ という流れになつたとき、事件が発覚した。

春川一家は、五大家族。

もしかして殺したかもしれない、殺人鬼が、どこかにいる。

いつ殺されるものかと怯えたよ。おれも、おれの一生はここで終わるのかって、絶望的な気持ちになった。

……おれんち、親が屑でさ。あんな屑から生まれて、自分まで屑にならないように必死に生きて、結果がこれかって思ったらやるせなかつたな。親は悪人だけど、おれは悪いことした覚えねえもん。なのになんでこんな目に遭わなきゃならねえの？

で、人がこんな状況に陥つたら、どうする？

どこに殺人鬼がいるかわからない。外かもしれないし、中かもしれない。みんな自分は犯人じゃないって主張してたけど、そんなの信用ならない。

とりあえず、逃げるだろ。

居間の窓。開め切られて、外から塞がれていた雨戸に、ひとりが椅子をぶつけて、雨戸と椅子が勢いよく吹っ飛んだ。午後の日差しが容赦なく差し込んできた。出入り口ができた。でもこの建物って、一階部分もけっこう高い位置にあるのな。

若い連中なら窓から飛び降りられたけど、老人じゃ厳しそうだった。といって、扉を外から開けようにも、雁字搦めにされて、開けられる状態じゃない。

命懸かっつんだから飛び降りろってひとりが言ったら、梯子か縄を探してくるって返答。けっきょく飛び降りねえの。殺人鬼怖くねえの？

——あいつらの誰かひとりでもいいから、警察に駆け込めばいい

なかにいた老人が言ったのが聞こえて、いらつとした。他人任せすぎじゃね？

とはいえ、今日もクソ暑いし、老人の歩くペース考えたら、若いおれたちが急いで行って戻ってきたほうが早いのは事実だ。

一度飛び降りた中年男が、先ほどの老人の言動に腹を立てたのか、しめるついでに残ると言った。で、壁よじ登るの手助けしたあと、若い四人で、屋敷から離れたつてわけ。

屋敷から門までは、見通しは悪くない。木が疎らに生えていて、茂みもなく、隠れる場所はない。人がいれば、すぐわかる。おれたち以外には誰の姿もなかった。それでも一応、周囲に気をつけながら、足早に門を目指した。

歩きながら会話して、衝撃の事実。

このミステリーツアー、てんで接点のない人間が選ばれてんのかと思ってたら、実は、親族旅行みたいなんだったんだと。というか、けっきょくそうだった、みたいなの。しかも、おれの地元の人たち。名前聞いて、すげえ驚いた。有名な地主の名字。

ごつい兄と、やたらべこつりした印象の弟、全然喋らなくて存在感が希薄なのが従兄弟

とにかく、おれの悪夢と似た夏は、それでやごと終わった。  
残暑も茹たるほど暑かった。

しばらく経って、涼しくなると、ようやく力が抜けた。  
清瀬の、兄と弟と従兄弟。

教えてくれた名前が嘘じゃなかったのなら、あの三人がどうなったかを調べたら、あれ  
が「ほんとうにあった出来事」かどうか、わかる。  
……緊張が解けるし、余計なことを考えるよな。

時間が経つにつれ、知ることが怖い気持ちが徐々に薄れてきた。そして知りたいと思う  
好奇心が少しずつ湧いてきてしまった。そろそろ、真実に触れてもいいんじゃないか、と  
思い始めた。それでもやっぱり怖かった。じゃあ、やめときゃよかったのに。

事件後の清瀬の状況っていうのは、つまり、処刑の「結果」だ。  
清瀬兄弟の弟のほう——清瀬宗次は、おれと同じ年。一個上が従兄弟で、だいぶ歳が離  
れて兄貴。ごつい兄貴に比べて、宗次は骨と皮だけみたいに瘦せてる。なんかべつとりし  
て、不思議ちゃん系の男パーションっていうの？ ひょろっと背が高く、髪がちょっ  
と長め。サブカル系？ オカルト系？

なんでもいや。

神曲を読んでたのも、おかしかったのもそれ。

処刑——おれもあの事件のことをけっきょくそう呼んでる。実際は私刑だと思うし、そ  
もそも口にする機会、ないけど。  
清瀬家は、地元だから、屋敷へ訪問しようと思えば難しくない距離だ。敷居の高さは別  
問題として。

清瀬宗次がどうなったのか、おれは調べることにした。とりあえず家の住所を調べた。

次に、家に近い中学を調べた。私立かかって思っただけと距離的に遠かったから、とりあえ  
ず公立として考えた。おれのクラスに、その中学出身のやつがいた。できるだけ不自然に

ならないように、もともとおれと宗次は幼馴染みか何かだったみたいに振る舞って、清瀬  
宗次について同じ中学だった？ 知ってる？ 今どうしてんのかな、どこ高だっけ？ みたい

に、話を吹っかけてみた。当たりだった。声をかけたせい、同じクラスだったらしい。

そいつがいうには、清瀬家の若い連中は昔、高校からは東京へ進学するんだと。でも宗  
次は都心に馴染めなかったのか、高校入学後半年くらいで、地元に戻ってきてるとか。

おれは、さいきん連絡取れなかったから気になってさ、って、ちょっと噂み込んだ。す  
ると、相手の顔色が変わったのが見て取れた。心持ち、声を低くして、

僕は君を殺さない

96 日に一度ほどしか食事を与えていないのが原因で、秀一さんはひどく痩せてしまいました。今となつては僕よりも体重が軽いのではないのでしょうか。

切っ先が揺れないように気をつけながら、もう片方の手で煙草を探して引き寄せ、親指で箱の蓋を開けて、一本をずらします。引き抜いて、唾液に濡れて小刻みに震えている唇に、押し当ててみました。

恐る恐るくわえたのを目視して、煙草の蓋を開けてテーブルの上へ投げ捨て、今度はライターを、指先で引き寄せます。

「なんで、おまえ……、こんな、何なんだよ……」

火を点けてあげると、吸い始めました。苛々するときは常に吸っていましたから、こうすれば少しは気持ちも落ち着くかもしれません。喫煙者ではない僕にはわかりませんが、そういうものらしいです。味わっていただきたいものです。最後の一眼になるのですから。何度か問い掛けられるたび、笑顔ではぐらかしてきましたが、そろそろお教えしてもいい頃合かもしれません。

「『風月村』の亡霊、です。秀一兄さん」

さまよっているとされる娘が僕だということは、あの場所で起こった事件の真相を知り、そしてみ消した清瀬家の人間ならば、よくご存知のはずです。案の定

「十年以上も経って、なんで」

と、秀一さんは目を見開いて、いかにも信じがたそうに、疑問を洩らしました。

不慮の事故により母親が亡くなったのち、娘がさまよっているという『風月村』の怪談。おかしい話です。

娘はいつ死んだというのでしょうか。だって「僕」はこうして生きています。年月が僕を大人に成長させました。そして実行の時がやってきただけのことです。

「こんな話です」

あるところに、小さな子供のいる夫婦がいました。

ですがその妻は、不倫をしていました。それがきっかけで離婚となり、夫のほうで親権を取りました。定期的に母子を面会させるのを条件に。ここまでは、それなりによくある話です。

あるとき、母子の面会に使われたのは、潰れかけの遊園地。ひとしきり遊んだのち、夕方になって、父親が迎えにやってきました。

けれど母親が子供を返そうとしなかったために、父親は激昂。逃亡を図る元妻を追い回して、お化け屋敷に駆け込んだ彼女を、ついに刺殺してしまいます。

97 刺殺した元妻をそのままお化け屋敷に隠した父親は、子供を連れて自宅へ戻りました。

そして教日後、遺書をしたためて、ドアノブで首吊り自殺しました。

記された内容のとおり、お化け屋敷からは女性の遺体が発見されました。

ところで、遺書は二枚残されていました。

女性の遺体を発見するに至る一枚と、誰も知らない、もう一枚。

その一枚が、僕の手元にある、殺人リスト。

元妻の不貞を咄い、僕の父親を厄介払いし、冷たい仕打ちや嫌がらせを続けた清瀬家とその関係者たちの名前。清瀬家、春川家、他の親族、元妻の不倫相手だった一家の名前。よほど恨んでいたのか、その男の娘の名前まで。

この際だからとばかりに、恨んでいた相手の名前が全て書かれています。

末尾には、全員を呪い殺す、と。

穏やかではありません。

それから十年以上をかけて、この呪いはそこそこの呪力を発揮した様子です。リストに記載されている人物は、それなりに死にました。

「呪いなんて、あると思いますか、秀一兄さん」

「あるわけ、ねえ」

秀一さんの胸元に灰が落ちました。彼を巻いて縛っているタオルの繊維が、じわりと焦

げます。

「そう。そんなものは存在しません」

呪いが人を殺すなんて、馬鹿馬鹿しいにも程があります。死んでから誰かを殺そうなんて、死んだあとの自分に無茶振りしすぎではありませんか。僕が死人の立場ならきこと憤ります。

他者を救済するためには、自分は生き続けなければなりません。呪いだなんて曖昧なもので、バスの窓にスモークフィルムは貼れません。

ただ。

生き続けるだけではおそらく、あの派手な舞台は用意できませんでした。協力してくれた「彼」には、心から感謝しなければなりません。

秀一さんが煙草を捨てました。僕のほうへ噴き飛ばそうとして、距離が届かず、絨毯の上へと落ちます。絨毯が焦げそうになっただけ、僕はそれを素早く拾い上げ、灰皿のなかで丁寧に潰しました。そんなことをしては、危ないではありませんか。

もし火が残っていたら、火事になってしまうかもしれません。

一馬は身を乗り出し、僕の言葉を待っています。目をそらすようにして、答えました。

「あの人がいなかったら喪主がいなくなる」

僕が大奥様の喪主だなんて、ごめんこうむります。

あのあと大奥様には、首吊り自殺ということになってもらいました。

清瀬家の財力ときたら、地元の医者に小金を握らせて嘘の診断書を書かせるくらいは余裕ですし、別段、初めてでもありません。権力のある悪人なんてどこにでもいるのです。

僕はあの晩、日沙子おぼさんを担いで隣家へ助けを求め、救急車で運ばれた日沙子おぼさんは、なんとか一命を取り留めました。

僕は部屋のテーブルに片肘をつき、頬を押さえながら、思わずため息を吐いてしまいました。

そんな僕の様子を見て、一馬はさらに、にやにや笑っています。

「よっぽど逃げ出してやりたかったらろ」

僕が帰ってからやつてくれたらよかつたのに、と何度思ったことでしょう。

そもそも僕は、大奥様を殺すために、清瀬家を訪れたのです。

毎日飲んでる葉袋に、葉ではない錠剤を一粒混ぜて、数日のうちに、眠るように死んでいただく予定でした。

清瀬家は山奥にあるので、屋敷のなかでは電波が届かず、携帯電話は利用できません。唯一の生命線である電話線も、到着後すぐに切断しておきました。準備万端でした。いったいなせ、あんなことになったのやら。

ともあれ、日沙子おぼさんには今死なれてしまうと後々面倒なので、救出しました。もし搬送先なりで死んだとしても、遺書があったので、僕が疑われることはないの見越しての行動ですけれども。

向かい合っている一馬が、さて、と姿勢を正します。

「で、あの女はどうなの？」

「あの女？ ああ、レイちゃん」

僕が問い返すと、一馬はぶつと噴き出しました。

「レイちゃん」

口真似をされると無性に腹が立ちます。唐突に訊ねられれば、普段の呼称が口をついて出てしまうのは不可抗力というものです。仕方ないでしょう。そんなに嬉しそうな顔で聞き込まないでください。

「もしかして、ご飯作ってもらううちに殺したくなくなった？」

「何言って」

「そういう顔してたからさ。恨みとか忘れられるといいな？」

忘れられるはずがありません。リストのなかで、レイの名前ははまだ消されずに残っているのですから。麻野の娘、レイ。最後のひとり。

一馬は唸りました。うつとりしながら、

「いいよね、麻野。きれいだよな。とりあえずやりたい。すっげー支配欲満たされそう。どんな声で鳴くんだろ？」

「……一馬」

「怒るなって。それにしても、あんな美しくないやつを元に、よくあれほど美しい生き物が生まれたもんだ。畑がよかつたんだな」

物言いが下賤すぎます。

「まあ、父親似じゃなくてよかった」

麻野が死んだときの様子を思い出したのか、一馬はぶるぶると身を震わせました。なんだかおぞましそうです。

「キモベドホモ野郎を殺すなんて、全然美しくないし。どうせならきれいなものを壊したいじゃん」

一馬は、僕を指さして嬉しそうにけしかけます。

「早く殺そう！ 何のんびりしてるんだ！ おまえの憎き敵だぞ！ 父親はさくつと殺したつていうのに」

「僕にも都合がある」

僕はストローを噛み、ずるずるとメロンソーダを吸いました。忌まわしい記憶は、こちらが油断すると采気なく飛び出してきて苦しめてくるので、蓋をしなければなりません。

「それにしても、母親のみならず、息子にまで手を出すなんて、いかれた野郎だ」

一馬のせいで、僕は一気に思い出してしまい、吐き気を催しました。弾けるメロンソーダで胃酸を押し戻し、ぴりぴりするのを誤魔化します。思い出させるために言ったのでしよう。ちょっと信じられないほどの性格の悪さです。

十二年ほど前の出来事になります。

よくレイに聞かせているあの怪談には、葬られた真実があるのです。

僕を捨てた母親は、そもそも子供の親権など必要ありませんでした。面会も、約束を破るのはどちらかという彼女のほうで。一カ月に一度か、二カ月に一度、三カ月に一度、となり、最後に会ったときは半年ぶりでした。「こんな人だったっけ？」と、まるで知らない女性に思えたほどでした。どんどん知らない人間に変化していく女性を、それでも母親だと思いたかつた幼い僕の甘さには、今思い返しても灰吐が出来ます。父から面会するかどうか訊

なるでしょう。

涙を拭いたら、レイはさっぱりした顔になりました。変わり身が早いというよりは、けっこうそうやって表情を隠すのが得意なほうです。

ほんとうはもっと泣きたいことくらいはわかります。不仲だった自分の両親の姿と重ねているのです。

「さてよ、夕飯は？ わたしおなかすいちやっだ」

いや、やはり変わり身が早い気がします。

けろりと泣きやんだレイは、早速食材の調理に取りかかるようで、腕まくりをしました。

「もしかしてもう食べたの？」

「ううん」

炭酸飲料の飲み過ぎで若干苦しいですが、きちんとした食事のほうが好ましいです。あいうジャンクなものを食べたり飲んだりしていると、頭の中まで添加物にまみれてしまいそうだと思うことがあるのです。

……というのは自身の胃袋を納得させるための言い訳に過ぎません。断るのは怖いので、自分によく言い聞かせ、胃袋に別腹を空けるほうがずっと楽です。

調理はレイ、調理以外の作業は僕と分担し、線引きした境界を、僕が越えることも許さ

れません。レイがいるとき、台所はレイのものです。なので僕はレイを残し、パソコンで書いていたメールの続きに戻りました。

——殺したくなくなった？

画面に向かうなり、一馬が口にしたあの言葉が蘇ります。

そんなはずがありません。

誰も彼もを呪いながら自殺していった父が残した仕事は、あとひとりでやっとな舞いなのです。清瀬家、春川家が断絶し、麻野や、他の何人かの関係者を人知れず殺害し……。

レイ。最後のひとり。

ただ、殺害方法に悩んでいるだけです。でも彼女には当てはまる「罪」がなく、だから処刑にも呼ばなかったのです。

台所から、レイが部屋を覗き込んできました。

「ねえ、そういえば今度あんた誕生日だね。生クリームつけて食べられる？」

「うん」

「わかった」

神妙な顔でそれだけを言っ、また戻っていきました。

のマフラーをしてるから、ひとかたまりの影みたに見える。  
眼鏡まで掛けてるものだから顔もわからない。おれ、人の顔覚えるの苦手だ。大人し  
うな印象だったことは覚えてても、じゃあどんな顔つて訊かれてもあんまり思い出せない。

「清瀬、誠？」

眼鏡の瞳が細められた。マスクのなかで笑ったようだ。

「名前、覚えてくれたんだ。誠でいいよ。おはよう、久しぶり」  
「なんでか、声が弾んでる。」

「……おはよ」

とりあえず、まだ生きてくれてよかったな、なんておれは思った。  
でも……何だろう。違和感。最初の印象と違う。処刑場で会ったとき、一言二言、会話  
しただけなんだけど、存在感が希薄で、物を言わないイメージだった。けど今は声も明る  
くて、嬉しそうだ。ほんとうに同じ人間だろうか。

「時間いい？ よかったら朝ご飯、食べない？」

誠は、コンビニのビニール袋を投げて奔越した。

「あつぷな。なんで投げるんだよ」

「ごめん。でも、怖がられたら困るから」

「は？」

「とりあえず、『どうぞ』」

「え、ああ、うん。いいの？ ありがとう」

レシートと一緒に買ったままのビニール袋から、からし入りのハムサンドとホットコー  
ヒーをもらうことにした。ハムサンドは生温くなっていて、コーヒーも生温くなってた。  
風の当たらなそうな木の根元のところに腰を下ろして、もらった朝ご飯を食べる。少  
し離れた残骸の隙間にすくまっつて、誠もマスクを引き下げて、おにぎりを食べてた。  
身にまとう雰囲気は変わらない。黙々とやけに静かそうになる。やはり同一人物だろう。  
前に会ったときは兄弟の手前、大人しくしていただけで、実はそんなに物静かな性格じゃ  
ないのかもしれない。

そういえば、処刑。

……飯時にあれを蒸し返すの、やだな。だからといって、ふたりで黙々と食事するの  
も妙な気分。おれたちつて、いったい何なんだろ。それで、

「怪我とか、大丈夫だったか」

と、訊ねてみた。三口目くらいを頬張ろうとしていた誠は、意外そうに目を上げた。

「なにが」

身代わりになったがために、僕と一馬が用意した処刑に巻き込まれて、まっただくの無関係なのに、危うく命を落とすところでした。

逃亡した人間を捕まえたはいいものの、よく話を聞けば、どうやら別人らしい。

一馬は、面倒だからこのさい殺しちゃおうよ、などと明朗に言い放ちましたが、一馬はともかく、僕自身は殺人リストに載っていない人間は、できるだけ殺めない方針です。

眠っている彼を横目に、リュックを漁りました。財布のなかに入っていた免許証から本名を知り、どれほど驚いたか、きくと誰も、想像つかないでしょう。

一瞬、息ができなくなりました。

僕は彼の名前を知っていました。ずっと。

\*

ああ、そうか。と思った。

たとえば、怪文書を持ってきたのは、こいつだ。

金網を破ったあと、休もうと提案したのも。

誘導するみたいな言葉は、いつもこいつの口から出ていた。物静かで、余計なことを他

に言わないから、なまに発する言葉が、奇妙な説得力を持っていたんだ。

処刑では七人か八人を手に掛け、秋津を行方不明にして、その後、清瀬宗次、清瀬秀一を、事故に見せかけて殺害した、抜かりのない殺人犯。自殺に見せかけて、祖母さんも殺したかもしれない。清瀬家の崇りの、実行犯。

まさかと思った。

逃げなくては。

おれが逃げるべき相手は、こいつだったんだ。殺される。死にたくない。でも、腰が抜けて、その場へたり込んでしまった。一歩も、後ろにさがれない。

「冗談……」

ポケットをまさぐって、誠が取り出したのは、家に帰ってから家中をひっくり返して探した、おれと妹の写真。それを持っているのは、この世でたったひとり。眠らせたおれを、わざわざ駅まで送り届けた人物。

こいつにかかれば、こんなにも隙だらけのおれなんてとつくに死んで……って思ったら、逆にちよつとだけ勇気が湧いた。そうさ、もしこいつがおれを殺そうっていうのなら、もう死んでるはずなんだ。殺す機会なんて、これまで、いくらでもあったら。殺されずにいた理由を知りたいのは、おれのほうかもしれなかった。

ました。僕を捜して、走り回ったのでしょう。膝に手を置いて、肩で息をしています。

「一馬。抜けてきたの。友達はいいの」

僕は一馬以外に友達らしい友達はおりませんが、彼は華々しい高校生活を謳歌しておりました。教室で名残を惜しむのを早々に切り上げてきて、よかつたのでしょうか。

「で、どうする？」

息を落ち着かせて、一馬は相手を崩しました。

「いつ殺す？」

慌てないよう、気をつけます。

「計画はまともしてる」

「俺がやつてもいいよ。楽しみ。すごくいいじゃん。卒業だし。そろそろかなって」

「明日、連絡する」

立ち去ろうと踵を返した僕の背中に、

「せつかくあんにお金けたんだからさ、俺にも見せてくれる？」

「見せるつて？」

「レイちゃん」が死ぬところ、その瞬間

「……うーん、まあ」

「壊れる瞬間つて、いいよな。首とか絞めるのもさ、抵抗して抵抗して、力尽きる瞬間、ふわつて抜けてく、あの一瞬がさ」

「相愛わらず悪趣味なことさ」

「何かで刺すのとかでもいいけど。掃除が大変」

「絞めるのは、僕は嫌いだ。力が要るし」

女性の首ならば、それほどではないでしょうか。日沙子お婆さんは大輿様の首をどんな風にして折ったのでしょうか。僕は一度、別の男を殺害するのに首を絞めたことで懲りて、宗次の首を絞めるのは断念してしまいました。それに比べ、突き落とすのはとても楽なのでおすすめですよ。

「どうやつて殺すの？ でも血を見るのもいいな。女の子と血つて、絶妙」

「……『死刑』を完成させる。美孝に即つて」

そう言うと、それなりに納得したようでした。

「それもいいな。ああ、そつだ、あそこ使えよ。葦玉郎。じき、取り壊しになるし」

懐かしい名前の屋敷です。葦玉郎をはじめ、一馬はこの計画に、相当の額を投資してくれました。一馬という後ろ盾を得たおかげで、殺人リストに基づく殺人計画は、ほとんど間違いなく実行されました。まあ一馬がいなくてもやつたとは思いますが、「死刑」はまず、

彼なしには行えなかつたでしょう。懐かしの舞台です。それにしても、わざわざ釘を刺しに来るなんて。

「馬はにたにたと愉<sup>たの</sup>しげです。

少し遠い目をしながら、

「俺はさ、『おまえ』が『レイちゃん』を殺す瞬間が見たい」

パソコン机の下に、抽斗<sup>ひきだ</sup>があります。あとから取りつけたもので、施錠<sup>しじやう</sup>できるようになっています。中に、古い手紙が入っていたことを、レイにはどうも気づかれませんでした。

机に向かいさすればすぐ気づかれる程度のお粗末な抽斗だったのですが、極度の機械音痴<sup>きかぢ</sup>を患<sup>かか</sup>っていたレイは、ここに座る用向きがありませんでした。抽斗の存在すら知らないでしょう。

鍵はいつも僕が持ち歩いていました。だから無闇に開けることはできません。ただ彼女が何をしてくるか、予想つかないのは困りものでした。時折、ほんとうに想定外なことをされました。炬燵<sup>かまど</sup>を出したりゲーム機を出したりは序の口です。想像の範疇<sup>はんちゆう</sup>を超えた奇想天外<sup>きそうたいがい</sup>さに、たびたび困らされたものです。

僕の手にある、二つ折りの手紙。

殺人リスト。父が残しました。

この呪いのかかった紙を、僕はときどき、憎みたくになります。

しかし、妻を殺したと書かれた手紙を、僕が捨てられるはずも、憎悪<sup>ぞうあく</sup>できるはずもありません。母親を刺殺<sup>さしか</sup>したという僕のいちばんの罪を被<sup>か</sup>って自殺した父に、僕がしてあげられることは、この呪いを実行する以外にないのです。

懐かしい筆跡<sup>ひつせき</sup>を指で辿っていると、玄関のほうで物音がしました。

呪いの達士<sup>たつし</sup>で飛ばした名前の主がやってきた様子です。同級生<sup>どうきゅうせい</sup>のお別れなどはいいのでしょうか。来るとしても、もう少しあとだと思つて、油断<sup>ゆだん</sup>していました。

リストをスボンの後ろのポケットへ突っ込み、僕はレイを出迎えるべく、ガラス戸のほうを見ます。明かりをつけていなかったで、夕方が近づいてきて暗く沈みつつある部屋へ、レイは疲れた様子<sup>よそ</sup>で入ってきて、ぎよつとしました。

「え、なに？、引越<sup>ひっこ</sup>してもするの？」

「うん」

室内は、おおよそ片づいています。

このところレイが来なかつたので説明する機会<sup>きかい</sup>がなかつたのですが、不要品<sup>ふようひん</sup>は捨てたり、

140 訳は通用しません。レイに他の異性との性的接触はないと思います。もし僕の子供かどうか訊ねたりしたら、どんな刑罰を与えられることか。

……僕の子供。

誇らしそうに、不安そうに、幸せそうに、怖々と立つレイを、僕はふたたび抱き寄せることにしました。今度はレイも、身を預けてきます。軽いと思っていた身体が、妙に重い気がしました。ふたり分たから、でしょうか。

腕のなかで、レイが小さく洩らします。

「愛したいよ」

産婦人科へ赴き、診察を受け、母子手帳をもらい、身体を気遣う日々を過ごす。どこかへ越して。生まれる子供が男か、女か。先生に聞くか、悩んだりして。

ごくふつうの、幸せな家族みたいな、淡い夢。

レイは知りません。知る由もありません。その子供が、まごうことなき殺人鬼の子供だなんて、想像すらしていないでしょう。存在してはいけない人間など、僕ひとりでじゅうぶんです。生まれながらにして十字架を背負わせる必要など、ありません。

「……レイちゃん」

「責任取りなさい」

「ん」

少し言葉に迷って、僕は、声を絞り出しました。

「あのね、一緒に、来てほしいところがあるんだけど」

「来てほしいところ？」

「うん」

静かに頷きました。

脳裏には様々な光景が、走馬灯の如く、浮かんでは消えていきます。いちばん深いところにある、黒く塗り潰された、どろどろと汚泥の溜まった、底無しの記憶の沼。レイの父に与えられた肉体的精神的苦痛。お化け屋敷の中、邪魔だからと言って僕の首を絞めてきた母。食堂のテーブルに置いてあったフォークを取り、咄嗟に母を刺したあの感觸。息絶えていた父の姿。

さらに、春川家に引き取られてからのひもじさ、冷たさ。清瀬家の兄弟に召使いのように働かされた日々、秀一からの日常的な暴力に、宗次からの陰湿な虐め。

腐臭とともに蘇る、父の墓を掘り起こした夏の夜。木を焼いて、焦げた木の根元に、骨をくりつけました。あの舞台へのさまざまな準備。

141 リスト上の人物名を消す作業を行いながら、いつの間にか、一馬とともに、血に酔って

いたようでした。自分が行き過ぎていると気づいても、後戻りはできませんでした。

逃してしまった男を山道で拾った熱帯夜の、吠え出してしまうようなほどの歓喜。しかし、殺したかった男とは別人でした。それどころか……。計画は崩れ始めました。

けれど殺人リストには、呪いがかけられているのです。計画を立て直し、秋津、宗次、秀一。大奥様については、これも想定外でした。よく思い返すと、ままならないものです。

計画がどうあろうと、僕はあのリストを選行し、何がなんでも全ての名を消し、完遂しなければなりません。見逃そうだなんて甘い考えでいる僕へ、これは神か、神でなければ悪魔からの、鉄槌<sup>てつゐ</sup>なのでしょう。どんな例外も、認められるべきではない。

深い呼吸を繰り返し、それでも、痛いほど打つ心臓の音は、なかなかおさまってくれませんでした。決意を固め、僕は彼女をしっかりと抱きしめます。

「レイちゃん、一緒に、行こう」

釋らなければなりません。これが、最後。

\*

清瀬家はもうない。

清瀬兄弟のお母さんが自殺未遂を繰り返して、その対応にあたった弁護士によって、あらゆるものが整理されて、屋敷も取り壊された。

あるのは跡地。意味わからないくらい広だけの。所有していた山は、国が県が一部購入して、五年後くらいに、高速道路が建設されるらしい。以前から土地の件で揉めてたらしいから、お役所側としては好都合だっただろうな。

こんな田舎、高速なんて通っても何の意味もないのに。

あの雪の日、誠<sup>まこと</sup>にすべてを告白された。

亡くなった父親の残した殺人リスト、共犯者——一馬という男の存在、計画の全て。それが処刑に巻き込んだ償いとして、自分がせめて差し出せる秘密だつて。

そんな重すぎる秘密をおれに抱えさせるなど、もはや誰に怒りを向ければいいのかや。

諦めただけさ。文句を言える人間はもう誰もいないんだからな。

あいつが死んだつて？

気を引こうと思つて、テキトーなこと言うな。

とつくに死んだはずだ。

町田で暮らしてるつてというのは、もし誰かから訊かれたとき、そう嘘を吐いておいてくれ、と言われたただだ。でも、あいつのこと訊ねるやつなんて、これまでいなかったな。

夜明けの時間が、僕は嫌いではありません。

冬型の気圧に極限まで冷やされた清涼な空気に胸を刺されながら、僕は懐中電灯で照らしつつ、一馬の先を歩きます。僕の足跡を辿る一馬は、その悪路ぶりに、白い息を吐いて嘆きました。

「冬場はこんなに降るのか、ここ……」

「一馬はここで過したことがないの」

「ないよ、遊園地で遊んだことも」

ここから西へ少しくだつていくと、風月村という廃遊園地があります。西洋風のテーマで造られた小さな遊園地。廃墟となった今では、無駄に雰囲気のある遺物に様変わり。

「死刑といえば、誠、あいつのことけつきよく、どうしたの」

「あいつ？」

「ほら、秋津の代わりに来てたやつ。考えるつって、持ってたじゃん」

「ああ。処理した」

「へえ。知り合いじゃなかったの」

「全然」

僕は彼の名前を知っていましたが、彼は僕を知りませんでしたから、「知り合い」の要

件を満たしません。昔あった事件のため、彼は地元の有名人でした。新聞で、名前を知りました。悲しい美談。大怪我を負った幼い妹を庇った兄。

僕にとっては、美談というだけでは片付けられません。珍しい名前だったため、ずっと覚えていました。もう、十年も前の出来事なのに。

「……何笑つてんの？」

「別に。少し、思い出して」

「殺したときのこと？ どんなんだつた？」

「善人だった」

「ふん」

彼を手に掛けるなど、できるはずがありません。素直そうで、思い描いていたとおり、人が善くて。

幼いころ、新聞記事を読んだとき、自分を顧みず、大切な人を助ける人の存在が、無性に嬉しかった。憧れました。彼の存在は、ひとりぼっちだったあのころの僕を救いました。いつか、もし会えるのなら、ありがとうと伝えたくった。そんな日が来るなんて、思いませんでしたが。

あの雪の日。会えて、心から嬉しかった。この人だと思うと、震えました。

振り返り、目を合わせました。

「本気で言ってるの？」

「もちろん」

一馬は咄嗟に踵を返し、僕に背を向け、慌てて走り出します。それはもう必死に。連続殺人の共犯である彼が、死を目前にして生にしがみつき、逃げ出そうとするのは、なかなか興味深いものです。

僕は追います。

「やめろ！ 来るな、来るな来るな！ なんで！」

殺されたくない、という気持ちが一馬にも存在するとは少し驚きました。

僕はそれなりに、このどうしようもない罪について、罰を与えられるべきだと考えていたのですが。

僕の足跡を辿っていた一馬ですが、それまで歩いた歩幅と、今走りたい歩幅は違っていて、そのうち、なんの跡もない雪の上を、一生懸命に走ろうとします。足跡のない白。冷静に考えれば、そちらのほうがよほど時間を取られるというのに。

肺を、凍てついた空気が刺します。鼻は折れそうなほど冷たく、耳も手指も悴んで、感覚が遠ざかっていきます。聞こえるのは彼が全身で逃亡を図る、雪をかき分ける音。

今度は僕が、一馬の足跡を辿る番です。あつという間に追いついて、彼の着ているコートのひらめいた裾を掴むと、一馬は転がり、雪へと突つ伏しました。

うつぶせた一馬の脛に馬乗りとなり、後頭部を掴むようにして顔を起こさせ、彼が身体を振るのに合わせて、仰向けにさせます。

一馬の手の平が空を掴みました。その手を避けて、抵抗する一馬が僕を捕らえるよりも素早く、顎の下から拳を入れます。速度と角度が肝要です。脳震盪を起こすように。

短い悲鳴も、全ては雪が吸収するでしょう。

さて、とても静かになりました。

ぐつたりとする馬の身体を、背後から、両脇に腕を差し入れて、引き摺っていきます。

途中で彼は気づいた様子ですが、どうやら動けません。意識がなくなれば好都合と思い、けつこう本気で殴りました。

「……やめろ、殺さないでくれ」

「大丈夫。怖くないから」

「死にたくない……」

一馬の頬を涙が伝いますが、これだけ気温が低いと凍ってしまいますので、泣かないほうがいいですよ、とは言いません。どうせ、涙も何もかも全て、雪解けまで凍るのです。

マフラー、コート、セーター。といつても会裸にする趣味はありませんので、手早く脱がせて、使えそうなものだけ使わせていただきます。

一馬の身体。マフラーで両足首を嚴重に縛り、コートを使つて、後ろで両手を縛り、セーターで顔を覆つて、うつ伏せに、穴へと横たわらせます。

盛つておいた土を、雪と混ぜながら、足からかけていきました。心臓の辺りには雪を多く。早く冷えるように。できるだけ苦しめないように。ときどき踏み固めながら、丁寧に。

彼はもう、目覚めることはできません。

最後に、セーターに覆われた顔に、土と雪をかけて、こんもりとなつた土の上に、周辺に積もっている雪を、てきとうに掛けました。

体中から力が抜けていきます。

耳や目のところが奇妙に熱を持ち、脈動が乱れて、視界が黒ずんできました。

頬が冷たい……。

気づけば重力に任せて、一馬を埋めた傍らに横たわっていました。ひどく眠いのです。このまま眠つてしまひましよう。

せつかくなので、空が見たい。仰向けに転がります。

ゆつくりと顔を押し上げました。

……視界にひらひらと揺れる赤。ああ、そうです。あれを残してはなりません。僕にはまだ、することが残されていたのです。おちおち寝ている場合にはありません。相変わらずの主張の激しさですから。

力を振り絞り、起き上がります。ぐずぐずしてはいけません。

——待つてる

腕を伸ばして、枝に結びつけてあたりボンをほどこきます。

僕の血に濡れても、染められることのない、鮮やかな赤。これを揺らしていた後ろ姿が、頬の裏に浮かびました。

彼女の髪を束ねたリボン。これは彼女のお気に入りだったようですが、盗んでしまいました。返せません。僕のものにすることを、どうか許してください。欲しいものを手に入れることが、人生のうちで一度くらいあつても、いいでしょう。ごめんと言えは彼女はまた僕をからかうから、謝らないことにします。

……怒るでしょうか。なら、怒つてくれるといい。彼女が頬を膨らませたり、紅潮させたり、僕にしか見せない羞憤を眺めるのが、嫌いじゃなかったのです。僕を困らせて。そして、僕のために笑つてくれると、もつといい。

どんな笑顔も、彼女にはよく似合っていました。彼女が笑うたび、胸が苦しくて、泣き

たくなりました。けれど、君は次にどんな風に笑うのだろう、と想像すると、たとえ泣き  
たくなつたとしても、もう、ずっと見ていたかつた。

湖に向かって、歩き出しました。

押し掛かる雪雲の、濃淡のいちばん濃いところから、雪の欠片が、ちらちらと降って  
ました。湖面を踏めば、靴底で、ぱりぱりと割れます。

一馬を埋めた跡も、僕たちが歩いた足跡も、全ては雪にかき消され、今晚には、なかつ  
たことになるでしょう。割れた氷も、また凍りつきます。

一步、また一步。

冷たい、という感覚は、ありませんでした。それは痛みと衝撃です。僕はそれに強い  
ほうだと自負しています。

水を割って、膝くらいまで来た湖の水が、体温を容赦なく奪います。

胸を撫で下ろすという感覚は、久しぶりです。こんなにも痛くて、そしてその感覚すら  
麻痺しびしそうになっているのに、心はこんなに穏やかで。

雪が全てを消してくれます。あとは、約束を守ってくれるようお願いながら、絶えるだけ  
なのです。きっと、彼なら守ってくれる。無条件で信じられる。会えてよかった。そんな  
存在がいることが、これほど有り難いとは思いませんでした。

やつと終わったのです。全てが。そう思ったら、急に吹雪いた湖面上、誰かの姿が見  
えるようでした。お父さん、と呼びかけます。声が届くでしょうか。

地獄への道すがら、呪いを完遂できなかつたことを、謝らなければなりません。僕はけ  
つきよく、父を裏切つてしまいました。

涙を流す必要はないのに、熱が頬を伝って、止まりませんでした。

\*

ただいま。今日、寒いね。

…顔、見たくなくてさ。へへ。おれ、妹の顔見る以外に、楽しみ、ないんだよね。

今日は時間があるから、夜までいようかな。面会時間いっぱい。迷惑だったら帰るから、  
ぜひ起きて、そう言ってくれよ。

…さつき、ちよつと嫌なことがあつたんだ。むかしのこと、思い出してた。

祖父いちゃんから連絡があつてさ、地方局から、取材を受けないかつて、打診されたんだ  
と。過去の事件を取り上げる番組のワンコーナーで、あの人は今みたいなのも兼ねてるだ  
なんて、馬鹿にしてる。